立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２００８年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　コミュニティ福祉学研究科　コミュニティ福祉学専攻		
指導教員	所属･職名	氏　名	
	コミュニティ福祉学部・教授	松尾　哲矢　印	
自然・人文の別	自然　・　人文	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名
研究課題名	障害者スポーツにみる「障害者」/「健常者」関係の構造とその変容過程に関する研究		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	コミュニティ福祉学研究科・コミュニティ福祉学専攻・2年	河西　正博　印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
研究期間	2008　年度		
研究経費	200　千円		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、車椅子バスケットボール競技者への質問紙調査を通じて、スポーツ場面における「障害者」/「健常者」の関わりによる「障害/健常」意識の変容過程について検討を行った。調査結果から、障害をもつ競技者の多くが、「障害者」ではなく「競技者」として自己をとらえるようになり、スポーツがアイデンティティ形成に大きな影響を与えていることが示唆された。しかし、「車椅子バスケットボールを通じて『障害』を乗り越えられたか」という問いには、約半数の競技者が「そう思わない」と回答しており、スポーツによって障害が乗り越えられるかのような図式は、必ずしもあてはまらないということが明らかになった。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔障害者スポーツ　〕〔アイデンティティ　〕〔車椅子バスケットボール　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

１．研究目的

障害者スポーツの領域においては、大きく分けてリハビリテーションスポーツ、競技スポーツ、生涯スポーツの視点から研究が行われているが、多くの場合、「障害」がスポーツ活動を阻害する負の要因として措定され、「障害者」「障害」という概念が画一的に捉えられている傾向が見られる。このような障害者スポーツ論においての障害者は、固定化された「障害者」として借定され、障害をもつ人々は常に「障害者」であり続けることになってしまう。つまり、障害者スポーツの進展が、「障害者というカテゴリーを構築し障害者を排除してきた『近代』のイデオロギーを強化するものとなってはいないだろうか」（高橋,1999）というように、障害者スポーツに関する言説それ自体が健常者/障害者の実体的な差異の言説の再生産となり、二項対立的な枠組みを強化してしまうという矛盾が生まれてしまうと考えられる。これらの点から距離を取るには、障害者スポーツに参与している障害当事者自身が、「障害」に対してどのような眼差しを向けているのかを検討することが重要ではないだろうか。そこで本研究では、障害者スポーツの中でも競技団体の組織化、競技力、競技人口等の点から、わが国の代表的なスポーツの一つである車椅子バスケットボールに着目し、スポーツへの取り組みと「障害」「障害者」意識の変容過程を検討するとともに、「障害者」競技者が「健常者」競技者に対してどのような意識を抱いているのか、両者の関わりによって「障害/健常」意識がどのように変容するのか、その変容過程について検討することを目的とする。

２．先行研究の検討

障害者スポーツに関わる研究はさまざまな視点で分類することができるが、行われる場や領域という観点で、大きく【リハビリテーションスポーツ】、【競技スポーツ】、【生涯スポーツ】に大別することができよう。

【リハビリテーションスポーツ】研究においては、スポーツのもつ身体的な効果についての分析が中心に行われてきている。身体的側面に与える影響については、各種の量的調査研究（藤田,1996）（内田・橋本,2001）（日本障害者スポーツ協会,2003）によって検討されており、この点に関連した大規模な調査としては、2003年に日本障害者スポーツ協会によって行われたものが挙げられる。

【競技スポーツ】研究の領域には大会の運営（クラス分けの方法、障害別大会、種目別大会の統合等）、競技力向上のための各種目団体のあり方、選手の強化策（矢吹,2003/矢部・草野・中田,2004）等が中心課題となっている。

【生涯スポーツ】の視点からは、スポーツをする場の確保、障害者スポーツ指導者の養成などの政策的な検討が中心課題となっている（藤田,1999）。これらの課題はいずれも、「どのような方法によって解決するのか」という具体的、政策論的な方法論の議論が中心となっているが、スポーツの主体者の確立という観点から、障害をもつ人々の置かれている状況に視点をおいた研究が必要となっているといえよう。これらの課題はいずれも、「どのような方法によって解決するのか」という具体的、政策論的な方法論の議論が中心となっているが、スポーツの主体者の確立という観点から、障害をもつ人々の置かれている状況に視点をおいた研究が必要となっているといえよう。

３．分析枠組み

ここでは上記の議論をもとに、障害者スポーツに参与する競技者の「障害」意識の変容を「アイデンティティ」の観点からみてみたい。奥田は（2003）は「障害者」という枠組みについて、「障害者とは、健常者が自己同一性を得るために異人として生成される存在であり、初めから存在するかのようなスタティックな存在ではなく、自他の関係性の中で絶えず生成されるダイナミックな存在として捉えることができる。」と述べている。つまり、心身機能の障害だけでは「障害者」は生まれず、「健常者」という集団が自己のアイデンティティ獲得のために、障害をもつ人々を集団内から排除することで「障害者」という枠組みが発生しており、その生成過程で障害をもつ人々はさまざまなスティグマを負わされてしまうと指摘している。上野（1996）は社会的弱者のアイデンティティの様相について、「個人のアイデンティティが少しも統合的なものではなく、一貫もしていない～（中略）多元的な現実を生きる個人は、多元的なアイデンティティ複合を文脈に応じて生きており、そのアイデンティティ複合内部の関係は必ずしも『同一性』では記述できない。」と述べ、個人のもつアイデンティティは単一のものではなく、場面に応じて複数のアイデンティティ間でねじれや葛藤が生じるものであると考察している。障害者スポーツの場における「障害者」は、まさにこのような複数のアイデンティティ間の葛藤を抱え、「障害者役割」と他の役割との間で揺れ動く存在であるということができるのではないだろうか。そこで本研究では、車椅子バスケットボールに参加することで、「競技者」としてのアイデンティティを獲得していく中で、否定的な障害観が完全に無化され「競技者」としての単一のアイデンティティを確立していくのではなく、「競技者」としてのアイデンティティを獲得しながらも依然として、「障害者である自己」をもち続けているのではないかといった作業仮説を設定し、「健常者」意識との関係で検討していきたい。

研究成果の概要　つづき

４．研究方法（調査対象・時期・方法）

2008 年 8 月、日本車椅子バスケットボール連盟加盟全チーム（88 チーム）を対象に質問紙を郵送し、46 チーム 313 名の競技者から回答を得た（回収率：52.2%）。

５．主な質問項目

質問項目は以下のように設定した。1.対象者属性（性別、年齢、職業、チーム所在地、障害区分・受傷原因、車椅子バスケットボール経験年数、競技歴、持ち点）/2.チームと自身の活動状況/3.スポーツ全般に対する意識について/4.車椅子バスケットボールへの取り組み・意識について（車椅子バスケットボールを始めるきっかけとなった人物、活動目的等）/5.障害者スポーツ観について（スポーツをするに当たっての障害の捉え方、車椅子バスケットボールを始めて障害に対する意識が変わったかどうか・どのように変わったのか、「健常者」とともにプレーすることについて）

６．結果の要約と考察

１）車椅子バスケットボール実施に伴う障害意識の変容

車椅子バスケットボール実施に伴う「障害」「障害者」意識の変容に関して、「障害者としてではなく、自分は競技者であるという意識を持つようになった」という項目に 70%以上の競技者が「そう思う」と回答している。つまり「障害者」としての役割を期待された人々が車椅子バスケットボールと出会い、「競技者」としての役割を獲得し、「障害」が相対化された結果、自らを「障害者」として、というよりも「競技者」として認識するようになったものと推察することができよう。しかし、車椅子バスケットボールに取り組むことによって「障害を乗り越えられた」と言えるのだろうか。この点に関して、「車椅子バスケットボールを通じて障害を乗り越えられたと感じている」という項目について、「そう思う」と回答した者の割合が、持ち点３点台・４点台と競技者志向の群では 60%を越えているものの、持ち点１点台・２点台と愛好者志向の群では 50%に留まっており、「そう思わない」と回答した者の割合が約半数を占めている。このことから、必ずしも車椅子バスケットボールを行うことが「障害の乗り越え」につながるわけではないことに注意する必要がある。上述の、障害者スポーツ競技者をめぐる「障害者」/「競技者」アイデンティティの複合と葛藤状態は、分析枠組みで述べた上野の「多元的な現実を生きる個人は、多元的なアイデンティティ複合を文脈に応じて生きており、そのアイデンティティ複合内部の関係は必ずしも『同一性』では記述できない。」という主張と重なるものである。競技者のアイデンティティ形成については、「障害者」か「競技者」かという二者択一が行われているわけではなく、個々人の置かれた状況に応じて、ねじれや葛藤を起こしつつ両者が存在しているのではないだろうか。

２）「障害/健常」意識の変容過程

「健常者」競技者との関係において 97.2%の競技者が「健常者」競技者とともにプレーしたことがあると回答していた。また「自分のチームに健常者選手が加入してほしいと思う」と回答した者の割合が 83.5%にのぼり、「『健常者』であることを意識せず、一人のチームメイト・対戦相手である」と回答している割合が 83.7%と大半を占めていた。これらの結果から大半の競技者が健常者との競技経験を有しており、健常者に対して、「健常者」としてというよりも「一競技」として位置付けながら、健常者に加入してほしいという意識をもつ人が多い。

しかしながら、「『健常者』の存在によって自分自身の障害を意識させられる」という項目では 35.1%の競技者が「そう思う」と回答している。これらの結果は、「健常者」と一緒にプレーしたい、「健常者」であることを意識しないと言いながらも、時に「健常者」の存在によって自身の障害が意識化されるという葛藤を抱え込んでしまうということを示唆するものといえよう。

近年、ノーマライゼーションやアダプテッドスポーツの思想のもとで、「健常者」の障害者スポーツ参加の機会が増加しており、「障害者」「健常者」がともにスポーツをする場が徐々にではあるが増えてきている。これらのスポーツ交流の目的として、「障害理解」や「障害者との交流」が挙げられる場合が多いが、単にスポーツをすることで相互理解が進んでいくのであろうか。上述のように「障害者」にとって「健常者」は、自己のアイデンティティを揺さぶる可能性のある存在であり、このような前提をなしにともにスポーツを行うことは、両者の距離がより開き相互理解を困難にする危険性をはらんでいることを自覚しなければならないのではないだろうか。

７．今後の課題

大多数の障害もつ競技者が「健常者」の参加について賛成をしており、ともにプレーする際には「『健常者』であることを意識しない」と回答している。しかしながら、その一方で「健常者」の存在によって自己の「障害」が意識化されるという傾向が看取され、障害をもつ競技者の葛藤の様相が明らかになった。今後、競技者の葛藤の生成過程および変容過程をより詳細に明らかにしていくために、「障害者」から見た「健常者」像だけでなく、「健常者」から見た「障害者」像についても調査を行い、両者を比較分析することで詳細に検討を行っていきたい。

※　この（様式２）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。